

峰ヶ丘会報

題字 宇田 靖 会長

第160号 2022 (令和4). 11. 30



農学部100周年Tシャツを着た学生たち。2022年8月のオープンキャンパスにて

CONTENTS

コロナ禍学生支援 第3弾	2
会長就任挨拶・理事長就任挨拶	3
特集 農学部100周年記念事業について	4
会員名簿の発行終了のお知らせ 及び名簿内容確認のお願いについて	6
こんな方いませんか?	6
退職のご挨拶	7
新任教員のご挨拶	8
追悼	10
クラス会	10
特集 宇大農学部の今	11
令和4年度理事会報告	16
支部長一覧・お悔やみ	17
決算書・予算書	18
お祝い・慶弔についてのご連絡・寄贈図書	19
昨年度退職の教員・今年度定年退職予定の教員	19
編集後記	19
こんなことやってます	20



大11～昭18 高等農林学校
 昭19～23 農林専門学校
 昭24～36 新制宇大
 昭37～ 宇大校章

MINEGAOKA NEWSLETTER No.160
 The Alumni Association
 Faculty of Agriculture
 Utsunomiya University
 Utsunomiya 321-8505 Japan
 E-mail:minegaok@cc.utsunomiya-u.ac.jp



会長就任挨拶

峰ヶ丘同窓会会長

宇田 靖 (化昭45卒)

峰ヶ丘同窓会員の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

この6月に開催された2022（令4）年度理事会（書面評決方式）で、思いがけず峰ヶ丘同窓会長に選任され、この7月から就任いたしました。

私は1970年（昭45）3月に農芸化学科を卒業し、修士課程（食品化学）修了後、2年半の甲府の山梨学院短大講師を経て、1974年（昭49）9月に農芸化学科助手に採用され、2013年（平25）3月に38年余の教職から定年退職しました。同窓会では常任理事や農学部創立80周年及び90周年の記念事業にも携わってきました。

本年は高等農林学校創立から100周年の節目に当たりますが、新型コロナウイルスの感染拡大により記念式典など記念事業の実施は来年11月に延期されています。峰ヶ丘同窓会としましても農学部と密接に連携しながら記念事業に向けていろいろ準備を進めているところです。

さて、学部あるいは大学院時代をこの峰ヶ丘キャンパス

で過ごし、社会に羽ばたいていった会員の皆様は、年を重ねるうちにふと峰ヶ丘で過ごした学生時代の経験や思い出が蘇ったり、思いがけない出会いで懐かしさを感じたり、卒業後間もない頃は先輩たちに勇気づけられたりと、各自の人生において峰ヶ丘で過ごした経験とその重さは計り知れないものがあると思います。峰ヶ丘同窓会の会員は、全国の支部会や各卒業生のクラス会、そして本部が毎年発行する「峰ヶ丘会報」などを通じて交流・親睦を深め、学生時代を心に呼び起こすものと思います。同窓会にはそれを支える大きな役割があると思います。ただ、ここ2年半ほどは新型コロナウイルスの感染拡大に翻弄され続けて、開催が延期された支部会やクラス会も多く、同窓会の活動も影響を受けています。また、4年ごとに発行してきた会員名簿も冊子体としては次回が最後の発刊になりますし、大学側からは同窓会組織の全学一本化も提起されているようで、峰ヶ丘同窓会も大きな曲がり角に来ていることは否めません。とは言え、このコロナ禍の中、在学生の皆さんへの支援も大事ですので、今夏も峰・陽東両キャンパスで生協食堂を通じて100万円規模のゆうだい21（付属農場産出米）を提供し安くて美味しい学食支援を実施したところです。

これからも峰ヶ丘同窓会がその役割を果たすべく、常任理事会の先生方や全国各支部の会員の皆様の大いなるご協力の下に役目を果たして参りたいと思いますので宜しくお願いいたします。



理事長就任挨拶

峰ヶ丘同窓会理事長

大久保達弘 (林昭57卒)

今年7月より峰ヶ丘同窓会理事長を仰せつかりました森林科学科の大久保達弘です。農学部卒業後、東大大学院農学系研究科修士課程林学専攻で2年間学び、その後、昭和60年（1985）に助手として林学科に採用され今日に至ります。その間、多くの諸先生、諸先輩、卒業生の方々のご指導をいただきました。定年まで残り1年半となり、最後にご恩返しのつもりでこの大役をお引き受けした次第です。

コロナ禍が続く中、同窓生の皆さまはいかがお過ごしでしょうか？対面での集まりが大きく制限される中、同窓会関連行事のうち農学部創立100周年記念行事は1年間延期となり、恒例の評議会も書面会議、クラス会もオンライン会議システムでのバーチャルなつながりに限定されたものになってしまいました。また、在学生のうち特に3年次生は、コロナ禍の始まりに入学し、対面での学科ガイダンス、同窓会歓迎会は全てキャンセルとなり、学生も教員も慣れない中手探りでオンライン授業をせざるを得ない状況から始まりました。クラスメートとの実験実習でのグループ学習、課外活動は生涯ネットワーク形成に大いに役立つことが考えられますが、初年次での対面経験の欠如は将来にわたり負の影響をもたらすことが懸念されます。コロナ禍以

前の卒業生は、私を含めて、大学生生活を通じた濃密な交流の時間があったからこそ、困難な時代においても同窓生同士のつながりが確保できているとも考えられます。その様な中、同窓会によるコロナ禍の学生支援として、特別奨学金の支給、附属農場のゆうだい21の配布、今年7月末に行われました大学生協とのコラボ事業で「100円カレー」販売など緊急支援を行いました。在学生への生涯ネットワーク形成へのお手伝いは、現役教職員の大切な役割であると理解しており、その一翼を担うことができれば幸いです。

今年の秋は、農学部創立100周年を迎えます。また農学部、峰ヶ丘同窓会が協力してコロナ禍で2023年11月に延期されます祝賀会開催に向けて準備を進めているところです。峰ヶ丘同窓会記念誌、創立100周年記念碑、卒業50周年祝典事業の発足など、同窓会に対するご協力お礼と感謝の気持ちを表す事ができる企画を準備させていただいています。

西暦2000年の節目に1000年後に残っている産業の一つに“農業”があげられています。まずその一歩である次の100年の農学を担う現役学生や若い卒業生の皆さまへのご支援を今後とも続けて計画していく所存です。国立大学では愛校心は育たない、と言われることがあります。先日山形県のブナ林での卒論調査の帰りに旧制米沢高等工業学校（現山形大学工学部）の保存校舎、同窓会活動を見学する機会がありました。その遺産保護活動は愛校心のかたまりであると強く感じました。峰ヶ丘同窓会の将来像もこの様なものであれば嬉しいものであると感じた次第です。今後とも同窓生の皆様方のご支援ご鞭撻を是非とも賜りたくお願い申し上げます。



農学部 100周年 記念事業について

— 式典開催（令和5年11月18日(土)） —



宇都宮大学農学部は、2022年（令和4年）、その前身である宇都宮高等農林学校が1922（大正11年）に設立されてから、100年目を迎えようとしています。本来であれば、本年度中に盛大に100周年をお祝いするところですが、新型コロナウイルス感染症拡大を受けて、記念式典を1年延期し来年度開催することといたしました。予定変更を余儀なくされてしまいましたが、来年度に向けて、農学部と峰ヶ丘同窓会でアイデアを出し合いながら、100周年記念事業を進めております。本稿では、現在準備進行中の事業を8つご紹介いたします。

1. 記念式典

当初、2022年の100周年記念式典開催に向けて、農学部100周年記念準備委員会を中心に準備を進めておりましたが、新型コロナウイルス感染症拡大を受けて、式典を1年延期し、**2023年（令和5年）11月18日(土)**に開催することといたしました。会場等、詳細が決まり次第、会報並びにホームページ等でご案内いたします。

2. 100周年記念誌 —同窓会報CD付き—

100周年記念誌を作成中です。種々の記念誌や記念アルバムの作成に実績のある広告代理店（株式会社ブレイン）と契約し、読みやすく、懐かしい写真を多く盛り込んだ記念誌を目指し作成を進めています。宇都宮大学農学部の歴

史とともに、同窓生の皆様の思い出が詰まった記念誌に仕上げていきたいと思っております。

また、長年に渡り発行してきた、峰ヶ丘同窓時報・峰ヶ丘会報を、電子データ（PDF）化する作業も進めています。100周年記念誌にはこれら会報のPDFデータの入ったCDを付ける予定です。当時の宇都宮大の様子、お世話になった先生の退官挨拶や若い頃の写真、支部会やクラス会の様子など、読みだすと止まらない内容になっております。社会背景も踏まえ歴史的にも価値のありそうな資料も多いです。ぜひ、ご期待ください。

記念誌（会報CD付き）の購入方法と価格は、次号並びにホームページにてお知らせいたします。



電子データ化した会報の一部
 (左) 昭和38年No.89
 (右) 昭和57年No.120

3. 記念名簿

峰ヶ丘同窓会『会員名簿』は、1929年（昭和4年）に発行されてから2017年（平成29年）まで、およそ90有余年経ちます。現存する一番古い名簿は、390名の会員が記された87ページの『同窓会員名簿』でした。1981年（昭和56年）からは4年に1度の発行になり、最新版は2019年（平成29年）20,000名の会員が記された468ページの名簿となりました。その間、多くの会員の相互親睦のために利用され、クラスや支部、事務局との連絡に、その役目を果たしてきました。

しかし、2005年（平成17年）に個人情報保護法が施行されてから17年、会員の情報開示者が年々減少、名簿購入者も会員全体のわずか5%となり、名簿の利用価値が大きく変わりました。同窓会事務局といたしましても、名簿発行について再度審議し、2023年（令和5年）の農学部100周年記念に合わせての発行を最後に、冊子での販売は終了することといたしました。今後、必要に応じて個別に対応できるように準備してまいります。

なお、現況調査と購入につきましては、別途に名簿作成業者（株式会社サラト）から郵便にてご連絡が届く予定です。ぜひご協力よろしくお願いたします。

4. シンボルマーク

農学のすばらしさを次の100年へ



宇都宮大学農学部

農学部100周年記念シンボルマーク

宇都宮大学農学部が100周年を迎えることを広く学内外に広報するため、シンボルマークを作成しました。デザインを2022年4月1日～2022年5月31日に

公募したところ、222作品の応募があり、農学部の教職員・学生による投票により、栃木県にお住いの新保怜奈さんの作品が選ばれました。

ご本人からは、「人と自然が築き上げた100年をイメージし、やわらかいタッチのイラストを入れ温かみのあるロゴに仕上げました。稲を強調し、生き生きとした輝く稲のように、農学部が成長してほしいと願いを込めデザインしました。」と作品に関するコメントをいただきました。また、100周年を迎える農学部に対して、「宇都宮大学農学部100周年誠におめでとございます。妹がこの学部におりまして多くの事を学び、また、素晴らしい先生方や友人と出会い立派に成長した姿を見せてくれました。この100年の農学の歴史をこれからの更なる発展に生かし、より良い未来となりますよう、願っております。」との嬉しいコメントもいただきました。

今回の公募に関しまして、多くの方々から作品の応募だけでなく、お祝いのお言葉をいただきました。大変ありがたいと思うとともに、多くの皆様が支えてくださったおかげで、この100周年を迎えることができたのだと強く思いました。

5. 記念Tシャツ

農学部100周年記念Tシャツを、県内でアパレル・雑貨・インテリアの企画・開発・販売事業を行なっている、「トチギマーケット株式会社」に依頼し、作成していただきました。2デザインで2色の、計4種類のTシャツが出来上がりました。8月6日に行われたオープンキャンパスでは、お手伝いに参加した学生の皆さんに着てもらい、大変好評でした。

この記念Tシャツはトチギマーケットの店舗やインターネットサイトでも販売される予定です。ちなみに、トチギマーケットの店舗は、今年オープンした宇都宮駅東口の「ウツノミヤテラス」にもございます。

なお、本Tシャツ売上の一部は農学部へ寄付されます。ぜひ同窓生の皆様にもご購入いただき、お揃いのTシャツで、100周年の喜びを分かち合えたらと思っています。



農学部100周年記念Tシャツ。色とデザイン違いで4種類作成しました。オープンキャンパスでは学生ボランティアの皆さんに着てもらいました。



6. 記念ポスターとショールーム

100周年記念ポスターを、農学部の広報係を務めている大野千弥さん（宇都宮大学教育学部2004年卒）に作成していただきました。峰キャンパス1号館正面玄関横のショールーム他、農学部建物内で掲示しています。また、ショールームには、宇都宮高等農林学校時代（大正末期～昭和初期）の峰キャンパス復元模型をはじめ、農学部の歴史にまつわる様々な品が展示されております。大学にお越しの際はぜひこちらのショールームにもお立ち寄りください。

また、100周年を機に、さらに展示物を増やし飾ってきたいと考えています。もし皆様の中で、展示できそうな品をお持ちの方がいらっしゃいましたら、同窓会事務局までご一報ください。



農学部100周年のポスター（大野さん作）とショールームの様子

7. 附属演習林に描く「U」の字

100周年を記念した農学部のシンボルを作成するため、附属演習林に「U」の字を描く事業が進行中です。塩谷町船生の演習林内の一部を伐採し、宇都宮大学の頭文字の「U」の形にヒノキを植林しました。近隣の道路からもUの字がしっかりと確認できるようになってきています。



演習林に描かれた「U」の字

8. 演習林材でつくった記念箸

学生や教職員の手によって大切に育てられてきた船生演習林の植林材を使って記念箸を作成しています。制作は森林科学科卒業生で木工作家の倉持海人さんをお願いしました。この記念箸は、以下の事業の記念品として記念式典な

どで来学された卒業生の方々に差し上げる予定です。

農学部創立100周年を機に「卒業50周年記念祝典事業」を新たに企画しました。これは、農学部卒業後の節目となる記念年に祝典を開催し卒業生をお祝いするとともにこれまでの同窓会活動へのご協力に感謝するものです。また同じく農学部創立100周年祝賀会において「親子3代農学部卒」を募集いたします。前回90周年では3組のご家族をお祝いしました。手作りのお箸の良さを味わっていただきたいと思います。

これら事業につきまして、皆様から多大な寄付金を頂戴し活用させて頂いております。寄付者の皆様に紙面をお借りして心よりお礼申し上げます。なお、農学部100周年記念事業への寄付金は「宇都宮大学3C基金」からお願いいたします（宇都宮大学ホームページからお手続きいただけます）。引き続き、ご支援、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

＊ ＊ 会員名簿の発行終了のお知らせ

及び名簿内容確認のお願いについて ＊ ＊

2023年（令和5年）の農学部100周年記念式典に合わせての発行を最後に、冊子での販売は終了することといたしました。今後、必要に応じて個別に対応できるよう準備してまいります。

また、最終名簿発行に伴い、今年の12月中旬に皆様方へ記載内容のご確認と名簿購入予約の調査ハガキを名簿作成業者（株式会社サラト）から送る予定です。お手元に届きましたらご確認くださいますようお願いいたします。

今後も皆様の相互親睦に努めてまいりますので、何卒ご協力くださいますようお願い申し上げます。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆ こんな方いませんか？ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆

親子三代！宇大農学部の方！

◇親子三代（直系）で宇大農学部に入學・卒業された方。

※故人も含まれます。

本学農学部は、今年創立100周年を迎え、来年の11月に記念事業が行われます。峰ヶ丘同窓会では、この記念事業にあわせて同窓生へ企画を用意しております。尚、100周年記念誌（同窓会報CD付き）の購入方法や価格は次号にてお知らせいたします。

【連絡先】 峰ヶ丘同窓会事務局

T E L : 028-649-5400 (月・水・金 9:00~17:00)

E-mail : minegaok@cc.utsunomiya-u.ac.jp

※不明な点、詳細等は、お問い合わせください。



7. 附属演習林に描く「U」の字

100周年を記念した農学部のシンボルを作成するため、附属演習林に「U」の字を描く事業が進行中です。塩谷町船生の演習林内の一部を伐採し、宇都宮大学の頭文字の「U」の形にヒノキを植林しました。近隣の道路からもUの字がしっかりと確認できるようになってきています。



演習林に描かれた「U」の字

8. 演習林材でつくった記念箸

学生や教職員の手によって大切に育てられてきた船生演習林の植林材を使って記念箸を作成しています。制作は森林科学科卒業生で木工作家の倉持海人さんをお願いしました。この記念箸は、以下の事業の記念品として記念式典な

どで来学された卒業生の方々に差し上げる予定です。

農学部創立100周年を機に「卒業50周年記念祝典事業」を新たに企画しました。これは、農学部卒業後の節目となる記念年に祝典を開催し卒業生をお祝いするとともにこれまでの同窓会活動へのご協力に感謝するものです。また同じく農学部創立100周年祝賀会において「親子3代農学部卒」を募集いたします。前回90周年では3組のご家族をお祝いしました。手作りのお箸の良さを味わっていただきたいと思います。

これら事業につきまして、皆様から多大な寄付金を頂戴し活用させて頂いております。寄付者の皆様に紙面をお借りして心よりお礼申し上げます。なお、農学部100周年記念事業への寄付金は「宇都宮大学3C基金」からお願いいたします（宇都宮大学ホームページからお手続きいただけます）。引き続き、ご支援、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

** 会員名簿の発行終了のお知らせ

及び名簿内容確認のお願いについて**

2023年（令和5年）の農学部100周年記念式典に合わせての発行を最後に、冊子での販売は終了することといたしました。今後、必要に応じて個別に対応できるよう準備してまいります。

また、最終名簿発行に伴い、今年の12月中旬に皆様方へ記載内容のご確認と名簿購入予約の調査ハガキを名簿作成業者（株式会社サラト）から送る予定です。お手元に届きましたらご確認くださいますようお願いいたします。

今後も皆様の相互親睦に努めてまいりますので、何卒ご協力くださいますようお願い申し上げます。

◆◆◆◆◆ こんな方いませんか？ ◆◆◆◆◆

親子三代！宇大農学部の方！

◇親子三代（直系）で宇大農学部に入學・卒業された方。

※故人も含まれます。

本学農学部は、今年創立100周年を迎え、来年の11月に記念事業が行われます。峰ヶ丘同窓会では、この記念事業にあわせて同窓生へ企画を用意しております。尚、100周年記念誌（同窓会報CD付き）の購入方法や価格は次号にてお知らせいたします。

【連絡先】 峰ヶ丘同窓会事務局

T E L : 028-649-5400 (月・水・金 9:00~17:00)

E-mail : minegaok@cc.utsunomiya-u.ac.jp

※不明な点、詳細等は、お問い合わせください。



退職のご挨拶



生物資源科学科 作物栽培学研究室
和田 義春

昭和62年6月に農学科に着任以来、
生物生産科学科、生物資源科学科と34

年余、農学部教職員の皆さまに支えられまして、何とか定年を迎えることになりました。長い間、お付き合いいただき、大変感謝しています。

この間、先輩の先生方のラッカセイやコンニャクに関するご研究のお手伝いをさせていただき、また学部学生、大学院生を指導しながら、主にイネを材料として水稻葉の老化制御に関する研究、インディカおよび日印交雑水稻の物質生産に関する研究、陸稲の耐乾性に関する研究、葉毛に関する研究、直播に関する研究、高温登熟障害耐性に関する研究、疎植栽培に関する研究、飼料イネに関する研究、酒米に関する研究などを実施しました。このほかに、C₃-C₄中間種に関する研究、イチゴのCO₂施肥に関する研究、リビングマルチに関する研究、エネルギー作物ダンチクの研究、薬用作物トリカブトの研究も実施しました。これらの研究で、多くの学生さんと非常に楽しい教育・研究生活を送ることができました。特に、若いころ、そして最近まで、学生さんとよく飲みに行って研究についてのみならず多方面にわたってお話できたことは私の人生の宝物です。

教員生活の最後に新型コロナウイルスによるパンデミックが起こってリモート授業を経験し、IT利用の新しい大学教育に少しだけ触れましたが、今後は大学教育も大きく変わっていくことが実感されました。AI問題だけではなく、ウクライナ侵攻にみられるような戦争や核兵器問題、地球温暖化に伴う気候変動、少子高齢化などいろいろと大変な時代で、大学における「知」の創出が強く求められると思いますが、宇都宮大学農学部が小なりといえども、きらりと光る存在であり続けて下さることを祈念しております。皆さまのご健康とご研究のますますのご発展をお祈り申し上げます。大変お世話になり有難うございました。



雑草管理教育研究センター
小笠原 勝 (農54回卒)

雑草研究の思い出

この春、36年間にわたる宇都宮大学での教員生活に無事、終止符を打つことができました。これも偏に恩師、教職員そして卒業生のみなさんの暖かい励ましのお陰であり、皆様方に心より感謝申し上げます。宇都宮大学農学部農学科を卒業した後、8年間の民間企業生活を経て、昭和62年に農学部附属雑草防除研究施設の助手に任用されて以来、月並みな言い方ですがあつという間の36年でした。振り返ってみると、世間一般には馴染みの薄い「雑草学」という学問に出会えたことがまずもってラッキーなことでした。そしてその雑草学が学問的にも社会的にもとても奥深く面白いもので、社会との関わりについていろいろ学ぶことができたことが大きな収穫でした。

学部3年の研究室を選ぶ時、その後、日本農業に就職した同級生のI君から「雑防は日本の大学に一つしかない研究室だから入ってみないか」と誘われたその一言がこの道に入るきっかけでした。そして何よりも幸運だったのは故竹松先生に出会えたことです。先生は身長150cm余りの小軀ながら学徒動員で戦時中、大変な苦勞をなされた厳父然とした方で、後に日本学士院賞を受賞した学識豊かな大先生でした。「世界の農耕地雑草とその制御に関する研究」という受賞題目が示す通り、先生の研究姿勢は術学とは無縁で、常に農家のための実学研究であり新しい除草技術の社会実装を目指した研究でした。除草剤が主たる研究対象だったことから、社会とどう向き合うべきか考えるところも多々ありましたが、先生方の助言と職員の方々の皆さんや卒業生の皆さんの優しさで、なんとか乗り越えることができました。本当に感謝の念でいっぱいです。有り難うございました。最後になりましたが、宇都宮大学農学部の益々の発展と峰ヶ丘同会の皆様のご健勝を祈念して、退官の挨拶に代えさせていただきます。

新任教員のご挨拶



酒井 佑一

所属・職種：農学部 森林科学科
助教
専門：砂防工学

2022年1月に農学部森林科学科に助教として着任しました酒井佑一と申します。和歌山県御坊市で生まれ育ち、和歌山市内の高校を卒業後、東京大学に入学し、同大学院農学生命科学研究科で博士号（農学）を取得しました。学位取得後は、京都大学大学院理学研究科において学振PDとして研究に従事し、この度、宇都宮大学で研究・教育に携わる機会をいただきました。

私の専門分野は砂防工学で、山地災害の防災に関わるものです。これまで、土石流災害の軽減を目的に、土石流の到達範囲の予測を目指して研究を行ってきました。土石流は豪雨などによって発生し、大量の土砂を含んだ流れで、山地渓流沿いの広い範囲で被害をもたらします。土石流というと、災害発生現場に見られる大きな石や礫のイメージが強いかと思いますが、これまでの我々の研究により、土石流の到達範囲には粒径の細かい土砂（微細土砂）をどれだけ含んでいるかが重要な役割を果たしていることがわかりました。具体的には、土石流に含まれる微細土砂成分を変化させた水路実験を行ったところ、微細土砂を多く含む土石流ほど流れやすくなり、到達範囲が広がることが明らかになりました。このような知見に基づき、微細土砂の含有量に応じて土石流の到達範囲を計算できる数値計算モデルを開発しました。近年の降雨パターンの変化により発生している大規模崩壊や、火山噴火に伴って発生する土石流は微細土砂を比較的多く含む特徴があり、以上の成果はこれらの土石流の到達範囲予測に貢献できると考えています。

これまでの研究では水路実験と数値計算が中心でしたが、今後は周辺に豊富なフィールドをもつ宇都宮大学の強みを生かし、フィールド調査と合わせて山地災害のメカニズム解明を行っていききたいと思います。特に、栃木県を含む北関東は急峻な山地と火山を持ち、豪雪地帯も存在することから、多様な山地災害が発生する可能性があります。学生とともに現場を歩きながら、地域から社会に貢献できる研究を目指したいと思います。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。



佐藤 元映

所属・職種：農学部 生物資源科学科
助教
専門：家畜飼料学、動物微生物学

2022年4月に農学部生物資源科学科に助教として着任いたしました佐藤元映と申します。高校卒業まで岐阜県多治見市で過ごし、卒業後は京都大学農学部に入學、そして修士課程まで在籍しました。その後、日本ハム株式会社中央研究所で研究者として、3年間研究を行いました。しかし、日に日にもう一度大学で研究に取り組みたいという思いが強くなり、お世話になった会社を退職し、京都大学の博士課程に入学いたしました。そして、2022年3月に学位（農学）を取得し、この度、宇都宮大学農学部で教育、研究に従事する機会をいただきました。

私は反芻家畜を対象に研究を行っております。家畜生産の問題点に飼料が人間の食料と競合している点や、反芻動物の第一胃（ルーメン）由来のメタンが地球温暖化の原因となっていることなどが挙げられます。これらの問題を解決したいと思い、京都大学では、反芻動物の飼料に関する研究、特に未利用資源の飼料化やメタン低減飼料に関して研究を行っております。最近ではルーメン微生物にも関心を持ち、研究を行っております。ルーメン微生物は飼料の消化や分解に大きく貢献し、反芻動物にとってなくてはならない存在です。ウシの生産性や肉質等とルーメン微生物の関係性を明らかにし、生産性の低い個体の価値を高めるなどの技術に応用できれば、日本の肉牛生産に貢献できるのではないかと考えております。

宇都宮大学では優しい先生たち、真面目な学生たちに囲まれ、充実した日々を過ごしております。私には企業研究者としての経験もありますので、その時に培った幅広い視野で物事を考えるということ大切に、教育や研究に邁進していきたいです。まだ着任して日も浅く、学生から「先生」と呼ばれるのにも慣れておりませんが、少しずつ先生らしくなっていきたいです。このように未熟な私ですが、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

新任教員のご挨拶



Schrager Benjamin

所属・職種：農学部 農業経済学科
助教

専門：国際農業経済・経営

2021年10月に農学部農業経済学科の助教として着任いたしました。米国のワシントン州オリンピア市で育ち、トウモロコシで有名なアイオワ州のグリネル大学で農業に興味を持つようになり、ハワイ大学マノア校の地理・環境学部で修士号と博士号を取得しました。

1998年に初めて日本を訪れ、家族と一緒に5人で神戸に住んで、公立の小学校に通いました。その経験を通して、日本に関心を持つようになり、色々な機会で日本の言語と文化に触れ合うことができました。宇都宮の前は、京都、宮崎、横浜と沖縄に住んでいたことがあります。

修士論文では米国ハワイ州における、Monsanto等の大手企業が経営している種子ビジネスについて調査しました。ハワイの農業史において主要産物であったパインアップルとサトウキビに代わり、2000年代には、種子産業、特にトウモロコシの種が同州最大の農業産業となりました。博士論文では宮崎市で2年間のフィールドワークを行い、日本における食肉用の養鶏の展開と日常生活について調査しました。日本の鶏に関して、養鶏の国際化および産業化、地鶏の認定システム、生の鶏肉料理の危険性、鳥インフルエンザとバイオセキュリティのようなテーマで論文を書きました。

2019年10月から京都大学大学院農学研究科で日本学術振興会ポスドクとして、日本国内における地域のフードシステムを通じた地域活性化について調査をする予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の拡大の影響を受け、コロナ禍における地域の農と食に関する活動について調査を行っていました。宇都宮に着任してから、コロナ禍の影響についての研究が続いています。

他の教員、学生、住民からの温かいご支援を受け、これから宇都宮や栃木県の農・畜産物について調査したいと思います。学科の学生たちと一緒に身近なフードシステムについて勉強したいと考えています。ぜひ、栃木の美味しい物をご紹介します！



赤坂 舞子

所属・職種：研究推進機構
雑草管理教育研究センター
准教授

専門：雑草学

2022年6月に雑草管理教育研究センターに着任致しました赤坂舞子と申します。出身は大分県ですが、学部は神奈川大学理学部、修士は横浜市立大学大学院、博士は千葉大学大学院と、学位は関東の大学で取得しました。学位取得後は農業・食品産業技術総合研究機構（以下、農研機構）での勤務を経て、この度宇都宮大学准教授として教育・研究に携わる機会をいただきました。

元々は遺伝子の機能解析に興味があり、大学ではタバコの形質転換体を用いた遺伝子の機能解析やコムギ遺伝子の発現解析等を実施してきました。学位取得後はポスドクとして農研機構でダイズ遺伝子の研究に携わる過程で、同じ建物内にあった雑草研究室が新規に導入したシーケンサーを借りに行くうちに、「雑草を遺伝解析で識別する研究等を本格的に実施したいのでやってみないか」と誘われたのがきっかけで雑草分野の研究をすることになり、今に至ります。雑草分野に進んでからは、雑草イネと呼ばれるイネにおける雑草性形質に関わる遺伝子の解析および遺伝解析に基づく識別手法の開発のほか、圃場での形態形質調査や水稻直播栽培での除草体系構築に関わる試験等のフィールドワークにも取り組みました。

宇都宮大学は雑草を研究対象にする研究室のある数少ない大学の一つです。本センターは前身を含めてその歴史も古く、着任にあたり喜びと同時に責任も感じております。前職において雑草防除に資する研究のニーズは現地において多々ありましたが、雑草分野の研究者が少なく、要望に応えられない現状を経験してきました。宇都宮大学を基点とした雑草分野の研究を発展させるためにはどうしたらよいか、学生の皆さんに雑草研究に興味を持ってもらえるためにはどのような授業を展開していけばよいか等を日々思考錯誤しながら努めていきたいと考えております。

教員としてもまだまだ未熟で恐縮ですが、ご指導ご鞭撻の程どうぞ宜しくお願い申し上げます。

追

悼

関谷治男先生を偲ぶ



宇都宮大学名誉教授関谷治男先生は、2021年9月29日に逝去されました。享年は97歳と伺いました。ご冥福をお祈りいたします。

宇都宮農林専門学校時代の昭和23年に、先生は実験・実習指導員に採用され、フランス式庭園のそばにあった管理室におられ、技官の方々と共に庭園と樹木の管理・養成にあたっていました。また、県内でも珍しかった大型ガラス温室の運用にあたって熱帯植物の栽培・研究を手掛けられ、実験圃場には多くの花卉類や木本類が栽植され、松などの盆栽類も収集保存されていました。当時はフランス式庭園と大温室のバナナなどを見るため県内外からの見学者で賑わったそうです。

昭和30年代、宇大農学科園芸学講座の助教授として花卉学を担当された先生は、花の構造と機能について独特の

口調で説明しておられたことを今でも思い出します。学生の成績評価は極めて厳しく、卒業判定会議では多くの学生が俎上にのぼり、毎年ハラハラしたものです。

昭和41年4月、6専攻からなる大学院農学研究科が設置され、先生は農学専攻で造園学を担当されました。私達大学院一期生を前にした講義では日本式庭園と西洋式庭園の趣意について熱く語ってくださいました。曰く、「日本庭園は、曲線と多様性を基に『静と和』の世界を、西洋式庭園は直線とその方向性を基に『動と成長』の世界を表徴するものである」と。

峰ヶ丘同窓時報 (No.127) に、平成元年3月に先生の「退官のご挨拶」が掲載されていました。その中には教育・研究に関する反省や社会奉仕活動への参加などを挙げられています。しかし先生が教授時代に取り組んでこられた「それぞれの施設に調和した和・洋式庭園の研究と設計」については触れていませんでした。

関谷治男先生、またお会いする時まで安らかにとお祈りいたしております。(農学科 昭和41年卒 松澤 康男)



クラス会 (1クラス会)

全国のクラス会のご紹介です。毎年たくさんのクラス会が催され、ご寄稿いただいています。紙面の都合上、写真は1枚、原稿は800字までとさせていただきます。何卒ご協力のほどお願い致します。

1

農経科第16回クラス会 (昭和43年3月卒業)

クラス会

参加者：猪狩・上野・桐生・田村・堀越・松津・山本・渡辺武夫・渡辺公之

令和4年9月15日(休)~16日(金)日光市鬼怒川温泉でクラス会を開催しました。クラス会は2年毎に開催しており昨年の予定でしたがコロナ禍により1年延期して今年の開催となりました。その影響もありいつもより少ない9名の出席でした。鬼怒川の清流を眺めて温泉にゆったりとつかり楽しい2日間となりました。初日の宴席はそれぞれの近況報告に始まりその後渡辺公之君のマジックで盛り上がりさらには部屋にもどっての酒と白熱したおしゃべりが夜の更けるまで続きました。

2日目は楯岩大吊橋を経て東武ワールドスクエアで1時間半の世界1周旅行を行いました。そこで有名な建造物



に感動し世界の広さを再認識しました。その後早めの昼食をとり解散となりました。

次回は堀越君と松津君が幹事となり楽しいクラス会を計画しますので皆さん2年後を楽しみに待っていて下さい。お2人よろしく願います。今回出席できなかった人も次回は是非会いましょう。(文責：田村)

特集

宇大農学部の今

—各学科の特徴と最近のトピックの紹介—



2022年現在、宇都宮大学農学部は5つの学科（生物資源科学科、応用生命化学科、農業環境工学科、農業経済学科、森林科学科）より構成されています。また、4つの附属・関連施設（附属農場、附属演習林、雑草管理教育研究センター、バイオサイエンス教育研究センター）と連携して、先端かつ特徴的な教育・研究を実施しています。本稿では、学科長、施設長の先生方を中心に、それぞれの組織の特徴と、近年（この10年くらい）のトピックや変化について寄稿していただきました。皆様が学生当時に所属していた組織が今どうなっているのか、現況を知る良い機会になりましたら幸いです。

生物資源科学科

生物資源科学科は、平成25年の改組（生物生産科学科4コースから応用生命化学科と生物資源科学科の2学科）により誕生し、来年で10年目を迎えます。教育研究分野は、植物生産、動物生産および応用生物などです。

植物生産分野において、教員数は9名であり、植物栄養学（担当：関本）、土壌学（平井、早川）、比較農学（福井）、園芸学（山根、黒倉）、植物栽培学（柏木、神山）、植物分子生理学（高橋）の研究室で構成されています。

動物生産分野において、教員数は6名であり、動物機能形態学（青山、栗原）、動物育種繁殖学（福井、松本）、栄養制御学（豊島、佐藤）の研究室で構成されています。

応用生物分野において、教員数は7名であり、植物育種学（房、大西）、植物病理学（西川、煉谷）、応用昆虫学（園田、香川）、分子昆虫学（岩永）の研究室で構成されています。

ここ数年での研究のトピックスでは、以下のような研究が挙げられます。

植物生産分野では、黒倉健先生が、園芸学会の奨励賞「イチゴ (*Fragaria* spp.) の形態形成および花成に関する研究」を受賞、および基盤研究B（2020–2022）「大果系イチゴの果実はなぜ大きいのか？」を採択されました。また、神山拓也先生の指導された学生さんが、今年、根研究学会の優秀発表賞「リン局所施肥に対するコムギ異形根の形態的応答」、および日本作物学会の優秀発表賞「ダイズの低リン耐性およびリン施肥応答に関する根系形質」を受賞しました。

動物生産分野では、佐藤元映先生が、今年、日本畜産学会奨励賞「反芻動物の未利用資源の飼料化およびメタン低減に関する研究」を受賞しました。

応用生物分野では、岩永将司先生が、昨年、日本蚕糸学会の日本蚕糸学会賞「昆虫由来培養細胞に潜在感染する *Bombyx mori latent virus* に関する研究」を受賞しました。

近年の学生の特徴としては、女子学生が男子学生より多い学年が増えたことや、コロナ禍の影響かもしれませんが、自宅からの通学者がやや増加しています。

施設整備について、昨年より、バイオサイエンス教育研究センターの改修が進められており、植物部門の教員研究室・栽培飼育培養設備、および動物部門（実験動物飼育施設）の飼育設備が新しくなりました。また、本年度は、真岡市にある農学部附属農場の本部棟を含む牛舎の全面改修が行われています。

私たちは、このような施設で充実した教育・研究を活発に進めることにより、「創立100周年を迎える宇都宮大学農学部」の生物資源科学科から、質の高い卒業生を社会へ輩出できるよう努力していきたいと考えています。同窓生の皆様には、私たちの教育・研究におけるご支援を今後ともよろしくお願い致します。（文責：福井、松本）



生物資源科学科での実習の様子

応用生命化学科

応用生命化学科は、生物生産科学科の応用生物化学コースを前身として、2013年4月に誕生した学科で、旧農芸化学科の流れを受け継いでいる学科ともいえます（「農芸化学科」の看板は現在も2号館（旧農芸化学棟）入口に掲げられています（写真））。現在は、学生定員32名、学科教員9名の小規模な学科となっており、本年4月には第10期生となる新入生を迎え入れました。本学科に入学してきた学生と接してみて、応用生物化学コースの時と比べて変わった

と感ずるのは、この学科で学びたいというしっかりした意欲を持った学生が増えたことです。定員約110名の大きな学科だった生物生産科学科では、2年次に進級する際に「分属」があり、4つのコースに分かれていました。その際に希望するコースへ行くことができず、仕方なく応用生物化学コースに進級してしまい、コースの内容に興味が持てない学生が時々いましたが、学科になってからはそのようなことはなくなりました。また、小さな学科となったことで、組織としての風通しが良くなり、意思決定がスムーズにできるようになったのも大きな利点であると感じています。

以下に近年のできごとをいくつか紹介します。

2009年5月から始まった農学部建物の耐震補強・改修工事は、本学科の多くの研究室が入る2号館A棟（旧農芸化学棟）を最後に2015年2月に完成しました。研究室、教室、そしてトイレなどが見違えるように綺麗になり、各建物にはエレベーターが設置され、バリアフリー化も進みました。そんな中で、学科の学生実験室のある建物だけは外壁の塗り直しが行われた以外、ほとんど手が加えられておらず以前のまの姿で残っています。最近では、老朽化が非常に目立つようになってきており、早期の改修が切望されています。卒業生の皆様が大学を訪れた際に、最も懐かしさを感じられるのは、この学生実験室かもしれません（写真）。

2019年には大学院の改組が行われました。農学研究科は、新たに設置された地域創生科学研究科に統合され、従来の生物生産科学専攻応用生物化学講座は、工農総合科学専攻の農芸化学プログラムと分子農学プログラムへと再編されました。新しい大学院は、文理融合・分野融合が特徴となっており、学生はこれまでよりもグループワークやプレゼンテーションを経験する機会が増加しました。しかしながら、大学院生の活動の中心が研究室における実験であることは以前と変わっていませんし、今後もそうあってほしいと願っています。

これまで長年にわたって教育・研究にご尽力いただいた阿部善作先生（2010年）、田中秀幸先生（2011年）、柳沢忠先生（2011年）、深見元弘先生（2012年）、宇田靖先生（2013年）、上田俊策先生（2017年）、東徳洋先生（2021年）が定年を迎え、退職されました。一方で、山田潔先生（2011年）、金野尚武先生（2013年）、水重真文先生（2014年）が着任しました。近年では、学科教員の採用が厳しくなっており、早く新しい教員が加わるのが待たれるところです。（文責：羽生）



2号館（旧農芸化学棟）入口に今も残る「農芸化学科」の看板。2019年の大学院改組で、「農芸化学」が工農総合科学専攻の教育プログラム名として復活しました。（応用生命化学科）



学生実験棟の外観と内部の様子。外装はきれいになりましたが、内部はあまり変わっていません。（応用生命化学科）

農業環境工学科

農業環境工学科は、国際的に認証されたJABEE教育プログラムを有し、誰もが自分の居場所をきちり見つけられ、満足度高く社会に旅立てることを第一義に学生教育に日々努めております。昨今、学生の進路は4割が公務員、3割が民間、3割が大学院進学とバランスよく夢の実現が可能であり、保護者の皆様からのご要望を満足するキャリア支援を行っております。

このような中、入学者選抜方法を一般選抜と学校推薦型選抜中心の2種類から、今回新たに「総合型選抜5名」「共通テストを課さない学校推薦型選抜I 5名」の枠を設け、是非宇都宮大学農学部農業環境工学科で学びたいと思われる生徒さんに出会い、その思いを大事に受け止めるべく、入試改革を行いました。もちろん、制度設計には高校の先生方との連携は何より重要で、学科教員10名で分担して高校訪問を実施して、現場の生のお声をお聞きして、受験生の皆様にとって魅力的な入試となるよう改革を続けております。「国立大学に入りたい、共通テストは水もの、やる気は負けない、受験機会を増やしたい、浪人は出来ない」などの今の受験生と保護者の皆さんの率直なお声を反映した入試です。

さらに、この入試の内容を含む、私達の想いを伝えるための「農業環境工学科のパンフレット」新たに作成いたしました。学科若手4人の教員に焦点を当てるとともに、新進気鋭のデザイナーに依頼した斬新な内容です（写真）。是非ご覧ください。



農業環境工学科のパンフレット

最後になりますが、広報活動を通じて思いますが、各地域で活躍しておられます、先輩方の努力の軌跡、これが今の宇都宮大学の高い評価に結びついている事です。その皆様との大事な交流、コロナ禍ではありますが、喜んで全国の集まりに参加させて頂きたいと思っております。皆様からのお声かけ、お待ちしております。もちろん、新たな入試方法の各地域での広報もお願いできましたら大変有難く存じます。宜しければ、皆様のご子息、お孫さん、受験されませんか？新たな入試枠を活用して！心よりお待ちしております！（文責：齋藤）

農業経済学科

農業経済学科は、これまで社会科学的な視点から食料・農業・農村問題に取り組み、農業の現場を支える農業経営学分野、計量経済学的手法を中心とする農業経済・情報管理学分野、地域の社会構造を問題とする農業社会経済学分野の3分野を中心に教育・研究を進めて参りました。これまでの学部改組においても「農業経済学」の旗を掲げて、高等農林以来の学風を曲がりなりにも継承してきたものと考

えております。卒業生は、公務員、農業団体、食品関連企業、地域金融を中心に、全国の地域経済を実践的に支える人材を輩出して参りました。同窓生の各分野でのご活躍によって、農業経済学科を支えて頂いたと感謝しております。

農業や地域経済を取り巻く環境は厳しいものがあります。特に、80年代後半以降のグローバル化は、農業や地場産業の解体を促進することとなり、少子高齢化による人口減少問題や耕作放棄地の拡大等、深刻な地域社会問題を累積させてきております。こうした危機的状況に対して、現場から農業や地域再生へ向けた取り組みも進展しておりますが、なお力不足は否めない現状となっております。

こうした中で、現場重視の学風を維持しつつも、教育・研究分野の拡張を進めて参りました。従来の経営・経済・計量分析に加えて、農業を中軸とする地域社会構造論、生態系の保全と循環型システムの構築を目指す環境・資源経済学、フードシステム論やマーケティング論の重視、国際化に対応した国際農業経済分野の拡張を進めて参りました。特に、国際経済分野においては農学部初の外国人教員を採用するとともに、女性教員の配置等も進めて参りました。

農学部100周年を迎えて、農業経済学科は再度の大きな改革が求められております。現在、データサイエンス・経営学分野の新学部構想が立ち上がり、農業経済学科にも協力が要請されております。加えて、農学部改組が同時進行しており、農業経済分野の拡張等が議論されております。新学部を含めた学部間連携による人文社会科学分野の強化とともに、農学部内における社会科学分野の統合化が検討されております。次の100年に向けた体制整備が課題となっておりますが、「農学栄えて、農業減ぶ」事がないよう肝に銘じて改革に取り組んで参ります。形は変われど、現場重視の学風を維持しつつ教育・研究を進めて参りますので、今後とも同窓生の皆様からのご指導ご鞭撻をよろしくお願い致します。(文責：秋山)



農業経済学科でのゼミの様子



農村調査実習における農家調査の様子 (農業経済学科)

森林科学科

森林科学科は、2004年にJ A B E E (日本技術者教育認定機構) 認定され、技術者教育プログラムを運営しております。2020年度末までに、937名のJ A B E Eプログラム修了生を送り出しています。学科カリキュラム上の特色は、森林の育成・管理から生産物の加工・利用までの一連の流れを基軸として、森林の持つ木材生産機能と環境保全機能を総合的に学習する点にあり、自然科学から社会科学までの広範な分野から授業科目が構成されています。栃木県内にある二箇所の農学部附属演習林(船生、日光)を中心とした実践的野外実習が重視されており、他大学と比較しても類を見ないほど多くの科目で、日数をかけた実験実習を開講しています。ただし、新型コロナウイルス感染症の影響により2020年度からは宿泊実習が実施できず、

2020年度は9月に前期、10月に後期の実験、日帰り実習を集中的に開講したため、内容を精査して実施可能な範囲で教育効果が得られるようにコロナ感染症対策を徹底しながら行いました。修了生の進路は、国および地方自治体の公務員ほか、栃木県内外および出身地域の林業団体・事業体の職員など、森林・林業・林産業に関わる専門技術者として勤務しております。

近年のトピックスの抜粋を以下に示します。

- ① 演習林組織と連携して、演習林を中心に実施されている実習等の強化を図るために、2014年11月に大学演習林単独としては全国初となる「森林管理認証(S G E C=緑の循環認証会議)」を取得しました。森林管理認証は、認定を受けた独立した第三者機関(一般社団法人日本森林技術協会)が審査機関となり、厳格に定められた国際的基準・指標・ガイドラインに基づき、適正に管理された木材生産のための森林であることを認証する制度です。その後毎年継続審査、2019年に更新審査を受審し、再認定され現在に至っています。
- ② 森林科学総合実習(4年前期)の中で、経営計画の実計画策定を行い森林認証の更新へ反映しています。
- ③ 農学部コア実習、森林工学実習、森林計測学実習における作業安全対策の実施、学生指導にあたって指導教員、技術職員の労働安全衛生特別教育の受講を実施しました。
- ④ 教員の資格取得、受賞については、測量士、衛生管理者(第一種、第二種)、防災士、ベストレクチャー賞(「農学部コア実習」、「森林基礎生物学」(計3回、殿堂入り)、「樹木学」)、学長表彰[総合(教育、運営、社会貢献)、研究]等があります。
- ⑤ 「オンライン版国際連携野外実習を通じた森林資源管理・利用と環境保全の共存に関する全学レベルの国際教育プログラム開発2021」を実施しました。2007年より招へいしてきた協定校タイ・カセサート大学林学部、韓国・慶北大学サンジュ校森林資源学科、インドネシア・ボゴール農科大学林学部に加えてマレーシア・サラワク大学の学生・教員、宇大全学大学院生を対象にしたオンラインセミナーを2022年3月に実施しました。セミナー内容は、これまで対面で実施した栃木県内の林業・林産業に関する野外実習(育林施業、伐出・製材加工作業)、林家経営見学、伝統木造建築見学、日光国立公園内の森林管理、都市林管理などの現地見学会説明、教員学生の研究室や研究内容紹介、学生間交流会などで、オンラインで行いました。(文責：大久保)



新入生ガイダンス時の愛山寮前での集合写真(2022.4.8)
(森林科学科)



日光演習林での樹木学実習(1年生)の様子(2022.6.15)
(森林科学科)

附属農場

附属農場は、農学部と共に歩んで参りましたので、今年度で発足から100周年を向かえます。また、県内各地に点在していた農場を統合して約102haの分野複合型の新農

場を現在の真岡市下籠谷に設置してから、来年で40周年になります。

この間、農場実習の位置づけは大きく変わりました。農学部を卒業しても農業分野へ就職する学生が3%以下となった現状を受けて、「座学を現場で実践的に活かせる経験知に昇華させる」という趣旨で2～3年生を対象に農場実習を行うカリキュラムから、「実習を通じて、食・生命・環境について体験的に学び、農学部生としての学びの基盤を醸成する」という新しい趣旨で1年時から農場実習に重点を置いたカリキュラムへと改定しました。その延長線上で、全学の基盤教育改革に合わせて、「食と生命のフィールド実践演習」を開講し、農学部以外の学生も農場で実習を履修できる体制を整備しました。さらに、平成22年度に発足した文科省の教育関係共同利用拠点事業では、全国の大学農場に先駆けて教育拠点農場として認定され、コロナ禍前の令和元年には12大学から延べ800人の学生を受け入れて様々な実習を開講しました。こうした状況を受け、実習の内容も少しずつ多様化してきました。圃場や牛舎での実習が中心であることには変わりないのですが、生命と農業の繋がりを学ぶ生殖科学に関する実習や生産物と食への繋がりを学ぶ乳製品加工実習やソバ打ち実習などを導入・強化してきました。

この間、農場の生産物の質の向上にも教職員一体となって取り組み、様々なブランド商品を開発してきました。その筆頭が食用米の「ゆうだい21」です。附属農場の圃場で育種選抜された「ゆうだい21」は、全国の大学で唯一の品種登録された食用米です。冷めても甘く美味しい特性が評価され、全国のローソブレンド米の主力品種として使われています。各地の食味コンテストでも上位入賞が続いています。このゆうだい21を含めて果実や野菜、うどん等を宇都宮大学農産物ブランド「うぶ」として販売しています（写真）。また、生乳についても、近年は基準乳価を大きく上回る高い品質を誇り、県内企業と連携した宇大牛乳やチーズや乳製品ブランド「純牧」バターを製造し、乳製品ブランド「純牧」シリーズとして販売しています（写真）。

また、皆さんは農産物を評価する指標としてGAP（GAP：Good Agricultural Practiceの略で直訳すると「良い農業のやり方」）をご存知でしょうか？GAPは、働いている人、地球環境ならびに植物や動物に優しい栽培や飼育を実践している生産体系を認証する制度で、農業版のSDGs（SDGs：Sustainable Development Goals「持続可能な開発目標」）とも呼ばれています。附属農場の水稲分野は2019年にAsia GAPを、畜産分野は2020年にJGAP認証を受け、技術職員の作業体系や実習内容の質の向上に活用してきました。



宇都宮大学農産物ブランド「うぶ」



乳製品ブランド「純牧」



牛舎と管理棟を建て替え、新農場として生まれ変わる予定です（2023年に完成予定）

これらの取組全体が文部科学省に評価され、令和4年度に2つの牛舎と管理棟を建て替える大型事業が予算化され、現在、建築工事が急ピッチで進行中です（写真）。来年4月には新農場として生まれ変わる予定ですので、卒業生の皆様には、是非ともお越しいただければ幸いです。今後ともご支援をよろしくお願い申し上げます。（文責：長尾）

附属演習林

宇都宮大学農学部附属演習林は、昭和12年（1937年）に宇都宮大学の前身である宇都宮高等農林学校の演習林として設置されました。現在まで85年にわたり教育研究施設として管理運営されてきました。「森林と人間との多様で持続的な相互関係に関する科学の実践フィールド」として、持続的保全管理に基づく体験的教育を通じて森林に関する専門家の育成、新たな森林管理論と高度な実践的技術の普及、最新情報の発信によって社会に貢献しています。

演習林は、栃木県内の林業地域にある船生演習林（538ha）と国立公園内にある日光演習林（208ha）からなる教育研究施設です。特に、船生演習林は標高280m～600mの林業地域に設置され、演習林職員により高性能林業機械による直営生産を続けています。

船生演習林は、平成26年（2014年）11月に、全国大学にある27演習林の中で単独では初めてとなる「SGEC（緑の循環認証会議）」の森林管理認証を取得しました。その後、毎年の継続審査を経て5年後の令和元年（2019年）11月に第2期更新審査を受けました。最近の主な活動は下記の通りです。

- ① 2015年5月末に住宅の第1号物件として演習林の森林認証材を採用した木造住宅が宇都宮市内で上棟されました。この住宅はCOCを取得している材木店が、製材、納材した物件で、ヒノキ3m×105mm角のKD材が柱及び土台に170本使用されました（写真）。

 演習林のヒノキSGEC材を使用した住宅
- ② 同年6月に、森林認証取得記念シンポジウム「保続可能な森林経営とは－森林認証の役割」を栃木森林認証協議会、宇都宮大学農学部森林科学科と共催で、峰キャンパス・峰ヶ丘講堂において開催しました。
- ③ 同年11月18日から20日まで東京ビックサイトにおいて開催されるアグリビジネス創出フェアに本演習林のブースを出展し、演習林の活動と森林認証材をPRしました。
- ④ 2016年1月に、文部科学省本庁のエントランスでの展示において、演習林活動と森林認証材のPRを行いました（写真）。

 文部科学省本庁エントランスでのPR
- ⑤ 2015年9月にSDGsが採択され、2016年にはSGECは国際森林認証であるPEFCと相互承認されました。このような状況の下、2017年5月に演習林内において演習林設置80周年の記念植林及び記念植樹を実施しました。林学では従来から林業経営の指導原則のひとつに「保続性の原則」があります。今日的な地球規模

の環境問題の改善・解決も包括するかたちで、「持続可能な森林経営」、つまり、「森林からの様々な恩恵を将来の世代が損なうことなく享受できるように伝えていくこと」に繋がっています。なお、演習林内には、1940年、紀元2600年の記念植林地が現存しています。

- ⑥ 演習林は職員による丸太の直営生産を行い、その丸太は競争入札方式で販売されています。また、近年は、再生可能なエネルギーである木質バイオマスの生産にも努めています。

国連が定めた「持続可能な開発目標（SDGs）」は、すべての人にとって、より良い持続可能な未来を達成するための青写真です。この達成のために、持続可能な森林経営は大きな役割を果たします。演習林は、森林認証を通じて持続可能な森林経営を更に推進していきます。（文責：飯塚）

雑草管理教育研究センター

雑草管理教育研究センターは、日本が世界に誇る除草剤の処理層理論を竹松哲夫先生が確立したことを受けて設置された農学部附属雑草防除研究施設が前身で、その後何回かの改組を経て、2021年4月に発足しました。最近では雑草管理の問題が農耕地のみならず公共の場や中山間地にも広がり、野生鳥獣管理上も重要との共通認識が形成されつつあります。こうした難防除雑草、地域植生、野生鳥獣の適正管理の課題を一体のものと考え、研究室の垣根を越えて技術開発に取り組むことを意図した改組でした。現在のメンバーは教員が4名、事務、技術の非常勤職員がそれぞれ1名、学生は4年生、修士課程、博士課程がそれぞれ8名、6名、2名となっています。教員はともかく、学生が自分の研究課題の枠を超えて議論（雑談？）するのをかたわらでながめるは楽しいものです。

さて、当センターの当面の重点研究課題は、植物関係では侵略的外来雑草の防除技術の開発や、中山間の地域植生を省力的に管理し、再生するための技術開発です。また、先般成立した改正植物防疫法により雑草が同法の対象に加えらるるに伴う検疫手法の確立も重要な課題です。動物関係ではイノシシ被害軽減のための技術開発に加えて、CSF（豚熱）への技術的対応が強く求められ、その全国的な拠点の一つにもなっています。

教育に関しては、これまで農学部、特に現在の生物資源科学科と密接な協力関係を構築して学生を受け入れてきましたが、今後は社会人教育にも力を入れていきます。雑草管理に対する社会的要請の多さに対して全国の大学に雑草学講座がほとんど設置されていないというミスマッチはいまだに解消せず、上述の改正植物防疫法を根拠とした人材



南側から試験圃場越しに雑草管理教育研究センターと農学部（1号館）。帰化アサガオ類の防除試験を行っています。



小笠原先生のお見送り（2022年3月31日）。在校生のほか、卒業生も何人が駆けつけてくれました。新しい看板は、書家でもある地デザの中島宗浩先生に書いていただいたもの。（雑草管理教育研究センター）

育成への要請の高まりも想定されます。そこで、植物保護学や作物学、環境科学といった関連分野を専攻して就職した後に除草剤開発などの実務に携わるようになった社会人を主な対象とする雑草管理関係の講座の開設を構想しています。受講者には、いずれ学位の取得も目指してほしいという思いもあります。同窓生の皆様にはぜひご協力をお願いいたします。なお、同様にミスマッチのある野生動植物管理に関しては、全国レベルでの教育システムの試行が始まっており、当センターはそこで中心的な役割を果たすことになっています。

私自身は宇都宮大学の同窓生ではありませんが、もともと雑草学が専門なので、当センターの重みは学生の頃から漠然と感じていました。しかし、2年ほど前に赴任して、除草剤メーカーや雑草管理関係の企業、団体に宇都宮大学の同窓生が想像以上に多く在籍していることに改めて驚き、また大変心強くも思いました。新型コロナの感染拡大で同窓生の皆さんと交わる機会が失われてしまっているのは残念ですが、将来を見据えて、日本の農業・農村や国土、産業界が輝かしいものとなるようご指導、ご協力をいただけたら幸いです。（文責：小林）

バイオサイエンス教育研究センター

バイオサイエンス教育研究センターのミッションは、①研究支援、②地域貢献、③研究推進です。これらの推進により、宇都宮大学の地域の「知の拠点」としての機能強化と、人材育成に貢献しています。

- ① 研究支援：「ゲノミクス解析部門」、「生体分子機能解析部門」、「アイソトープ利用部門」、「動物部門」、「資源植物部門」、「バイオリソース部門」、「植物分子農学研究部門」の各部門を設置し、動植物の飼育栽培、遺伝子組換え実験、生体分子化学分析等をサポートできる体制が整っています。
- ② 地域貢献：地域の小・中学生対象の「科学実験講座」、高校生と高校教員対象の「バイオテクノロジー体験講座」、「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）」の支援などを通して、地域のバイオテクノロジー分野の理解推進、人材育成に貢献しています。科学技術振興機構（JST）の人材育成プログラムであるグローバルサイエンスキャンパス（GSC）実施機関の担当部局として受講生の支援を行っています。県試験場や県内企業との共同研究推進により、地域社会に貢献しています。
- ③ 研究推進：専任教員8つの研究室の約60名の教職員学生を中心に、学科・学部を越えた200名以上の登録利用者と連携した異分野融合・共同研究を推進し、部門の枠を超えた数名の特任教員・研究員も加え、高水準で特色のある研究を推進しています。

トピックとして、最近では、謝肖男准教授が、日本テレビ「満天☆青空レストラン」で取り上げられるさまざまな農産物の成分分析で、食品の特色をわかりやすく伝えるための情報を提供しています。また、野生イチゴに関する研究プロジェクトが本年度より開始されています。

（文責：平田、燕山）



バイオサイエンス教育研究棟

令和4年度理事会報告

令和4年度理事会は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止となりました。

このため、令和3年度決算及び監査報告、令和4年度予算について、新（R4年度）・旧（R3年度）各理事・監事への書面による承認をお願いし、構成員（会長・副会長・理事長・常任理事・理事・監事）89名中、過半数となる69名の方から常任理事会への一任をいただきました。

これにより、以下の報告をいたします。

会務報告

1. 常任理事会等の開催

- 2021. 6. 14 第1回常任理事会
- 2021. 7. 26 第2回常任理事会
- 2021. 9. 13 臨時常任理事会
- 2021. 10. 6 第3回常任理事会
- 2021. 11. 17 第4回常任理事会
- 2021. 12. 22 第5回常任理事会
- 2022. 1. 24 令和3年度宇都宮大学同窓会連絡協議会
- 2022. 2. 14 第6回常任理事会
- 2022. 3. 11 第7回常任理事会
- 2022. 4. 27 第8回常任理事会
- 2022. 5. 18 第9回常任理事会
- 2022. 6. 13 第10回常任理事会
- 2022. 6月 令和4年度理事会中止

2. その他の行事

- 2022. 3. 25 学位記授与式
- 2022. 4. 4 新入生歓迎会中止
- 2022. 4. 5 入学式
- 2022. 5. 17 会計監査

3. 「峰ヶ丘同窓会報」の発行

- 2021. 12. 10 第159号発行

4. 支援制度

教員教育研究支援制度（農学部栄誉賞） 計1件
 学生支援制度
 （学費支弁1件・農学部栄誉賞5件・農学部奨励賞4件）
 計10件
 以上会務報告

会長委嘱理事（令和4年度）

理事長	大久保達弘（林57）
常任理事	生物資源科学科 福井えみ子（畜院62）
	○房 相佑（農院H5）
	香川 清彦（農H3）
	応用生命化学科 金野 尚武（生化H16）
	農業環境工学科 守山 拓弥（環院H16）
	農業経済学科 大栗 行昭（経院58）
	（○印：新任）

令和4年度事業計画

1. 常任理事会の開催
2. 「峰ヶ丘会報」の発行（年1回 全会員に送付）
3. 「学生支援制度」の実施
4. 「教育研究支援制度（教員会員）」の実施
5. コロナ禍学生支援の実施（大学生協コラボレーション100円カレー提供）
6. 学生評議員会の開催
7. 各支部総会への出席
8. 大学諸行事の協力
9. 農学部への協力支援
10. その他

令和4年度理事・監事

会長	宇田 靖（化5）
副会長	大塚 国一（開48）
	後藤 達夫（経46） 福島支部長
	大嶋 稻良（開51） 群馬支部長
	菊池 正蔵（農46） 茨城支部長
	鈴木 英雄（林H2） 埼玉支部長
	青柳 俊明（開61） 栃木県庁支部長
理事長	大久保達弘（林57）
常任理事	大栗 行昭（経院58） 香川 清彦（農H3）
	福井えみ子（畜院62） 守山 拓弥（環院H16）
	房 相佑（農院H5） 金野 尚武（生化H16）
理事	樋口 弘道（農40） 野口 隆夫（経55）
	菊地 正憲（農45） 黒後 貞夫（経H7）
	合田 健二（農46） 田所 広起（経H14）
	木村 陽一（農50） 上野 知彦（経H16）
	石川 成寿（農52） 山口 直紀（経H17）
	植木与四郎（農58） 植木 保夫（畜40）
	川原 直人（生植H7） 石塚 正恵（畜47）
	鷲尾 一広（生応H7） 吉澤 緑（畜50）
	上田 正人（生応H8） 押久保 徹（畜57）
	貝賀 信保（生応H9） 小野 英俊（生動H8）
	柳田かりん（資源R2） 横山 晃子（生動H9）
	小松 茂夫（林45） 上野 武二（工32）
	立壁 敏夫（林46） 小川 正順（開49）
	福田 慎造（林51） 福田 保（開50）
	斉藤 倫明（林55） 青柳 俊明（開61）
	津布久 隆（林58） 五月女寛行（環H7）
	篠崎 武彦（森H7） 飯塚 幸恵（環H8）
	潮田 健司（森H10） 大久保尚彦（環H12）
	木野本 亮（森H12） 加藤 秀正（化40）
	小島 延介（経33） 杉田 和之（化50）
	花塚 功先（経40） 本島 俊明（化57）
	津谷 好人（経45） 田崎 公久（生化H10）
	関川 元樹（経50） 石原島由依（生命H29）
	國谷 渡（経51） 高橋 廣美（総42）
監事	中山 喜一（農56） 清水 靖夫（開59）
	岡田 武（畜45）
顧問	学長 池田 宰
	学部長 山根 健治
	和賀井睦夫（農25）
	竹永 博（工40）
	松澤 康男（農41）

お祝い

このたびは、おめでとうございます。

叙勲

2019 春	瑞宝小綬章	経45	加賀美和正
2020 秋	瑞宝小綬章	農31	齋藤 一雄
2021 秋	瑞宝中綬章	化40	竹内 安智
2022 春	瑞宝中綬章	農39	一前 宣正
2022 春	瑞宝小綬章	経49	小原 勉

知事表彰

令和3年度 彩の国森林・林業表彰 開54 佐怒賀 淳

昇任

農学部附属農場教授	高橋 行継
農学部教授	岩永 将司
農学部教授	二瓶 賢一

慶弔についてのご連絡

峰ヶ丘同窓会会員の慶事および弔事の際には、会員の方々からのご連絡に基づいて対応しております。慶弔事が発生しました際には、下記事務局までご連絡ください。

I. 慶事（褒賞、叙勲等）の場合

1. 受章者、受賞者の氏名、年齢、卒業年次、学科、住所、電話等
2. 受章、受賞の種類（褒賞、叙勲その他の賞の種類）
3. 受章、受賞の日時

なお、叙勲のご連絡は、新聞などに掲載されますが、学歴まで記されておりませんので、事務局で判断し掲載することができません。関係各位からのご連絡により、ご報告とさせていただきます。何とぞご了承のほどをお願いいたします。

II. 弔事の場合

会員、会員以外の顧問・元顧問、現職教員、元教員が対象となります。

1. 逝去者の氏名、逝去日、卒業年次、学科
2. ご遺族（喪主）の氏名（逝去者との続柄）
3. 通夜・告別式の日時、場所

なお、事務局宛にご連絡がない場合、当方からの郵便物の送付を中止できませんので、何とぞご了承のほどをお願いいたします。

●連絡先：峰ヶ丘同窓会事務局
TEL：028 (649) 5400
E-mail：minegaok@cc.utsunomiya-u.ac.jp
月・水・金 9：00～17：00

寄贈図書

「実践 樹幹注入の心得－害虫から木を守る－」	栗原 俊光
「句集 舟唄」	伊藤 啓泉
「羽前千歳駅物語」	酒井 利悦
「ふるさと発見 大江－重要文化的景観 最上川舟運の歴史とロマンを訪ねて－」	大江町教育委員会
「雑草害～誰も気づいていない身近な環境問題～」	小笠原 勝
「もっとディープに！カラス学 体と心の不思議にせまる」	杉田 昭栄

昨年度退職の教員

令和4年3月31日をもちまして、以下の教員が退職されました。

・児玉 剛史 ・福村 一成

今年度定年退職予定の教員

令和5年3月をもちまして、以下の教員が退職されます。令和5年3月までの連絡先は、以下の通りです。

・大栗 行昭：農業経済学科 028-649-5511
ohguri@cc.utsunomiya-u.ac.jp

次回会報発行日程
原稿締め切り日のお知らせ

同窓会では皆様からの情報をお待ちしております。次号の会報は、農学部100周年記念特集号として、2023年7月に発行する予定です。原稿の締め切りは2023年4月末となりますのでご了承ください。宜しくお願いいたします。

編集後記

今年の9月末に「日本きのこ学会」が宇都宮大学で開催されました。3年ぶりの対面開催でしたが、全国から150名のきのこ研究者が宇大に集まり、研究発表はもちろん、久しぶりの再会に雑談も盛りあがりしました。主催者の我々は大変でしたが、オンラインではできない交流ができ嬉しく思っています。いよいよ来年2023年の11月に100周年記念式典が開催されます。支部会やクラス会も再開するかと思います。なかなか同窓生の皆様ともお会いできませんでしたが、来年こそは現況報告と思い出話が対面でできることを楽しみにしております。コロナ前、地元の支部会にお呼ばれし、日本酒の美味しさに負けてご迷惑をおかけしてしまいました。それからお会いしていないため、若干怖さはあるのですが、この場をお借りしてお詫び申し上げますとともに、また呼んでいただけることを心から願っております。（文責：NK）

こ な こ と

やっています (その16)

森林生産保全学プログラム

森林生産保全プログラムは、文理融合・分野融合を推進する指導体制で高度な問題解決能力を備えた人材を育成する地域創生科学研究科の博士課程前期の学位プログラムで、工農総合科学専攻に属しています。地域創生科学研究科の特徴は、全学体制で多様な分野の教員による研究指導をするため、学生の専門分野だけでなく、異なる分野の教員による指導を受けることができ、幅広い視野を養うことができます。また、学際的な思考力・実践力に資する科目も配置したカリキュラム構成としています。

森林生産保全プログラムにおける育成する人材像は、森林・林業に関する高度な知識・技術を修得して、森林と人間の多様で持続的な関係の構築や森林資源の利活用に資する能力を有し、持続可能な豊かな地域社会の創生に貢献できる人材です。そこで、博士課程前期課程では、学部教育4年間プラスの2年間という位置づけの考えに基づいて、教育研究活動に取り組んでいます。学部のJABEEによる森林科学教育プログラムに基づき、森林科学全領域を網羅するため、育林学、森林社会学、森林工学、および林産学の4分野を柱とし、附属演習林(写真-1)を活用するなど実践的教育を展開し、教育の質の保証を担保しています。森林生産保全学プログラムの2年間は、学部4年間のJABB教育プログラムをより発展させた6年一貫教育的なシステムに基いて、より高度の教育の質の保証に取り組んでいます。

ここに、2022年3月に博士課程前期を修了した学生の研究テーマを示します。

- ① ヒノキ人工林における列状間伐後の成長動態の検討
- ② 点群データを利用した若齢針葉樹人工林における林分構造と成長動態の解析
- ③ 日光街道桜並木における材質腐朽病害の発生状況と主要な腐朽菌の発生特性
- ④ 福島原発事故の影響を受けた広葉樹大径材内の放射性セシウムの挙動

紙面の都合上④について簡単に紹介します。2011年3月に発生した福島原発事故により環境中に放出・飛散した放射性セシウムについて、栃木県高原山系の散孔材のブナとイヌブナ(散孔材)およびコナラ(環孔材)の大径木を対象に、樹幹内(水平(樹高方向)と垂直(半径方向))における放射性セシウムの変動・分布パターンを明らかにしました。放射性セシウムは、ゲルマニウム半導体検出器(写真-2)で測定しています。現在、福島原発事故後10年が過ぎたことで森林生態系の放射能汚染は減少し、平衡状態になりつつあります。

(文責：森林生産保全プログラム長 飯塚 和也)

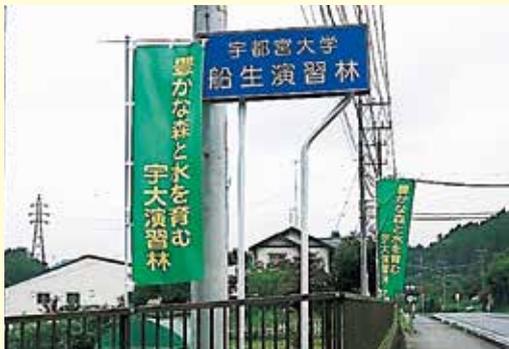


写真-1 宇都宮大学農学部附属演習林



写真-2 ゲルマニウム半導体検出器